秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の私立の成績は公立より優れているのか？

山津 幸司（佐賀大学教育学部）

Are the performances of private schools better than public schools at the Kyushu District High School Baseball Tournament in Saga in the fall?

Koji Yamatsu (Faculty of Education, Saga University)

（*Received July 4th, 2023；accepted for publication December 7th, 2023*）

要旨

高校野球において私立高等学校の躍進が目覚ましい。2021年と2022年の8月に開催された全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園大会）に出場した49校の7割超（38校）が私立であり、平成以降の優勝校の9割超が私立であることから、夏の甲子園大会における私立の優勢は顕著である。夏の甲子園大会予選における私立の優勢は佐賀県でも認められつつある。すなわち、夏の甲子園予選佐賀大会の全大会を分析した先行研究では私立の優勝率が有意に高いとはいえないものの、最近15大会に絞ると私立の優勝可能性は公立の12.8倍と有意に高くなる。一方、選抜高校野球大会（春の甲子園大会）では、都道府県と地区ブロックで2回の予選突破が求められる。そのため、春の甲子園大会への出場は狭き門である。佐賀県勢の出場は平成以降では11校であり、そのうち公立が90. 9%（10校）を占め公立校が優勢に見える。そこで、本研究の目的は春の甲子園大会への一次予選となる秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会における戦績は公立と私立のどちらが優勢かを明らかにすることであった。研究対象は、2007年から2022年の秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の全16大会のいずれかに出場した43校（公立37校、私立6校）であった。χ^2検定の結果、私立の優勝率は50.0%（公立13.5%）、準優勝以上への進出率は83.3%（公立29.7%）、ベスト4以上への進出率は100%（公立54.1%）、準優勝複数回進出率は33.3%（公立5.4%）で公立に比べて有意に高かった。ロジスティック回帰分析の結果、私立の準優勝以上となるオッズ比は11.8（95%信頼区間は1.23−113.2）であり、私立が準優勝以上となる可能性は公立より11.8倍高いことが示された。以上のことから、佐賀県における春の甲子園大会の1次予選である秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会においても私立優勢の可能性が示された。本研究の方法論にはいくつかの課題が残されているため、本当に私立が優勢なのか、私立優勢の理由は何かを明らかにしていく必要がある。

Key words: 高校野球，硬式野球，運動部活動，ベースボール，格差

Ⅰ. 研究の背景と目的

高校スポーツにおける多くのメジャー種目では一般的に私立が運営する学校の部活動の成績が優勢である。特別に強化している一部の公立校も認められるが、全体からみると少数派である。私立優勢の傾向は高校野球でも例外ではない。近年開催された第103回（2021年）と第104回（2022年）の全国高等学校野球選手権大会（以下、夏の甲子園大会）では、出場した49校のうち77.6%（38校）と2年連続で7割以上の出場校が私立であった。さらに平成以降の甲子園優勝校は夏の甲子園大会が33大会中90.9%（30校）、選抜高校野球大会（以下、春の甲子園大会）では34大会中94.1%（32校）が私立の高等学校であった（阪神甲子園球場ホームページ，2023年6月30日現在）。以上のことからも、高校野球における私立学校の優勢は全国的な傾向といえるだろう。

佐賀県における高校野球はどうだろうか。佐賀県の公立高等学校硬式野球部による夏の甲子園大会における顕著な実績としては、1994年の佐賀商業、2007年の佐賀北高校の全国優勝がある。夏の甲子園大会におけるこの公立二校の活躍の記憶が根強く残り、佐賀県の高校野球に関しては公立校が善戦しているとの印象がもたれている。実際に、夏の甲子園予選佐賀大会の全大会を分析した先行研究では私立が有意差をもって優勢とは言えない（優勝率は私立66.7%，公立33.3%，p=0.117）ことが示されている（山津，2023）。しかし、夏の甲子園予選佐賀大会の全45回大会を3期に分けると、最初と中間の15大会では私立と公立の優勝率に有意差は認められないが、直近の15大会では私立の優勝率（私立66.7%，公立13.5%，p=0.003）は有意に高く、公立に対する私立の優勝可能性は12.8倍であった（山津，2023）。以上のことから、夏の甲子園予選佐賀大会においても私立高等学校の近年の優勢は顕著となりつつあることが伺える。

一方、高校野球のもう一つの注目大会は春の甲子園大会である。春の甲子園大会の選抜方法は少し特殊である。夏の甲子園大会では各都道府県における一度のトーナメント戦の優勝校が参加条件を満たすのとは対照的に、春の甲子園大会は各都道府県の一次予選とその後の地区ブロックでの二次予選の成績をもとに出場校が推薦されることとなっている。すなわち、各都道府県のトーナメント制の一次予選で上位2チームが地区ブロック大会に出場し、地区ブロック大会の上位進出校（九州ブロックでは例えば上位4校）が春の甲子園大会への出場に推薦されるという流れである。このように二段階での選抜となる春の甲子園大会への出場は狭き門となりがちである。佐賀県からの春の甲子園大会への出場は平成以降では11校（1989年の佐賀商業と龍谷［私立］、1992年の佐賀商業、2000年の佐賀商業、2001年の鳥栖と神埼、2004年の佐賀商業、2006年の伊万里商業、2007年の小城、2018年の伊万里［21世紀枠での出場］、2022年の有田工業）である。11校のうち10校は公立で私立は1校のみである（阪神甲子園球場ホームページ, 2023年6月30日現在）。以上をまとめると、春の甲子園大会への出場は佐賀県勢にとっては狭き門であるが、佐賀県勢としての数少ない出場校は公立校が多数を占めており、春の甲子園大会の一次予選である秋季の九州地区高等学校野球大会の成績は公立校が優勢である可能性も予想される。

前述のように、夏の甲子園予選佐賀大会では近年私立の優勢が顕著となりつつあるが、春の甲子園大会出場につながる秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会では公立と私立のどちらが優勢かは不明である。そこで、本研究の目的は、九州地区高等学校野球佐賀大会の秋季の成績は公立と私立のどちらが優勢なのかを明らかにすることであった。

Ⅱ. 研究方法

2-1. 研究対象

研究対象は、佐賀県高等学校野球連盟（http://kouyaren-saga.jp/）に2007年度から2022年度に加盟していた43校（公立37校、私立6校）であった。分析対象となった全43の高等学校の名称や運営主体の情報を巻末（付録１）に示した。分析対象大会は、秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会における2007年（第121回大会）から2022年（第151回大会）までの16大会とした。分析対象大会をこの16大会とした理由は、秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の出場校や試合結果がインターネット上のホームページ（高校野球ドットコム，https://www.hb-nippon.com/）に完全にデータベース化されていたからである。2006年以前の大会でもベスト8以上の進出結果を示した情報源は複数存在したが、参加チーム数や合同チームでの参加状況が不明であったため今回は分析から除外した。九州地区高等学校野球佐賀大会は秋季と春季の年に2回開催されるため、秋季だけでみると「2007年の第121回、2008年の第123回」のように大会数が2ずつ進むことになるので注意を要する。

佐賀県の公立高等学校では数回の統合が実施された。そのため、2007年から2022年に大会出場した全高等学校を分析対象とし、統合前の大会結果は統合前の学校の成績として、統合後の結果は統合後の学校の成績として分析を行った。分析対象期間中の公立校の統合は5回であり、2007年に武雄青陵と武雄（統合後は武雄高校として存続）、2018年に白石と杵島商業（統合後は白石高校として存続）、嬉野と塩田工業（統合後は嬉野高校として存続）、鹿島と鹿島実業（統合後は鹿島高校として存続）の8校が4校となり、2019年には伊万里農林と伊万里商業（統合後は伊万里実業として存続）の2校が1校に統合された。分析対象期間中の秋季大会への出場参加チーム数は巻末（付録２）

に示した通りであった。秋季大会では様々な理由により複数の高等学校が合同チームで参加する場合がある。合同チームとして参加する理由は、部員が9人に満たない場合や学校統合により連名で参加する場合等である。分析対象期間中の合同チームでの参加回数は計7回14校であった。具体的には、2014年の嬉野と太良、2017年の嬉野と唐津青翔、2018年の嬉野と塩田工業、2019年の伊万里商業と伊万里農林、2020年の神崎と厳木、2021年の唐津青翔と厳木、2022年の高志館と唐津南、であった。また、理由は不明であるが大会不参加が計2回あり、2010年と2011年の東明館であった。

2-2. 分析方法

分析に用いたのはカテゴリー化された変数であった。すなわち、「優勝」は各大会の決勝戦で勝利した学校、「準優勝」は決勝戦で負けた学校、「ベスト4」は準決勝戦で負けた2校、「ベスト8」は準々決勝戦で負けた4校として集計を行った。また、「準優勝以上」は決勝戦に進出した2校、「ベスト4以上」は準決勝戦に進出した4校、「ベスト8以上」は準々決勝戦に進出した8校、と定義した。また、上記の大会上位進出を分析対象期間中に2回以上、すなわち「複数回進出」したかどうかも分析の観点とした。用いた統計解析はχ^2検定とロジスティック回帰分析であり、有意水準は5%未満、有意傾向は10%未満とした。

Ⅲ. 結果

1）秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の成績のクロス集計の結果（表1）

分析対象となった16大会の試合成績の集計とχ^2検定の結果は次の通りであった。

優勝校は公立が5校、私立が3校であった。優勝回数は最多が佐賀商業（公立）と佐賀学園（私立）の各4回、続いて佐賀北（公立）の3回、唐津商業（公立）、鳥栖（公立）、小城（公立）、早稲田佐賀（私立）、東明館（私立）が各1回であった。統合により消失した公立校の優勝はなかった。優勝成績の割合（優勝率）をχ^2検定にて分析した結果、私立の優勝率は50.0％で公立の13.5％より有意に高率であった（p=0.0331）。

準優勝校は公立が9校、私立が3校であった。準優勝回数は最多が唐津商業（公立）、神埼清明（公立）、龍谷（私立）、佐賀学園（私立）の各2回、佐賀商業（公立）、伊万里（公立）、有田工業（公立）、鳥栖工業（公立）、鹿島（公立）、伊万里商業（公立）、鳥栖（公立）、北陵（私立）が各1回であった。準優勝成績の割合（準優勝率）を分析した結果、私立の準優勝率が50.0％,、公立が24.3％であり、これらに有意差は認められなかった（n.s.）。

ベスト4進出は公立が15校、私立が4校であった。ベスト4進出回数は最多が佐賀工業（公立）と唐津南（公立）の3回、次いで佐賀北（公立）、佐賀商業（公立）、神崎清明（公立）、高志館（公立）、鹿島（公立）、鹿島実業（公立）、鳥栖（公立）、龍谷（私立）、佐賀学園（私立）の各2回、白石（公立）、多久（公立）、伊万里実業（公立）、伊万里商業（公立）、鳥栖商業（公立）、佐賀西（公立）、敬徳（私立）、東明館（私立）の各1回であった。ベスト4進出の割合（ベスト4進出率）を分析した結果、私立のベスト4進出率が66.7％、公立が40.5％で有意差は認められなかった（n.s.）。

ベスト8進出は公立が24校、私立が6校であった。ベスト8進出回数は最多が鳥栖商業（公立）の5回であり、次いで鳥栖（公立）と有田工業（公立）、敬徳（私立）の各4回、佐賀北（公立）、佐

賀商業（公立）、白石（公立）、鳥栖工業（公立）、鹿島（公立）、小城（公立）の各3回、唐津商業（公立）、神崎清明（公立）、塩田工業（公立）、唐津工業（公立）、唐津西（公立）、佐賀西（公立）、佐賀東（公立）、東明館（私立）、北陵（私立）の各2回、伊万里（公立）、伊万里実業（公立）、伊万里商業（公立）、鹿島実業（公立）、杵島商業（公立）、佐賀工業（公立）、太良（公立）、唐津南（公立）、龍谷（私立）、佐賀学園（私立）、早稲田佐賀（私立）が各1回であった。ベスト8進出の割合（ベスト8進出率）を分析した結果、私立のベスト8進出率が100％、公立が64.9％であり、これらに有意傾向が認められた（p=0.0822）。

表１の二段目以降に、分析対象の大会で準優勝以上に進出した割合（準優勝以上進出率）、ベスト4以上に進出した割合（ベスト4以上進出率）、ベスト8以上に進出した割合（ベスト8以上進出率）、同一校が2大会以上優勝した割合（優勝複数回進出率）、同一校が2大会以上準優勝した割合（準優勝複数回進出率）、ベスト4に2大会以上進出した割合（ベスト4複数回進出率）、ベスト8に2大会以上進出した割合（ベスト8複数回進出率）、準優勝以上の成績を2大会以上獲得した割合（準優勝以上複数回進出率）、ベスト4以上の進出を2大会以上獲得した割合（ベスト4以上複数回進出率）、ベスト8以上の進出を2大会以上獲得した割合（ベスト8以上複数回進出率）を分析した結果を示している。その結果、私立の準優勝以上進出率（私立83.3％，公立29.7％）、ベスト4以上進出率（私立100％，公立54.1％）、準優勝複数回進出率（私立33.3％，公立5.4％）は公立校より高く有意差が認められた（p<0.05）。

2）ロジスティック回帰分析の結果（表2）

ロジスティック回帰分析の結果、準優勝以上への進出で有意な関連性が認められた（p=0.0322）。すなわち、私立の準優勝以上への進出のオッズ比は11.8（95%信頼区間は1.23-113.2）であった。以上の結果は私立が準優勝以上となる可能性が公立と比べて11.8倍高いことを意味している。

また、優勝、準優勝複数回進出で有意傾向が認められ、いずれも私立の優勝や準優勝への複数回進出可能性が公立に比べて高い傾向が示された（p<0.10）。

Ⅳ. 考察

本研究では、春の甲子園大会の1次予選にあたる秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の最近16大会の成績が公立と私立で異なるのかを検証した。その結果、表１に示したように、私立の優勝率、準優勝以上進出率、ベスト4以上進出率、準優勝複数回進出率がいずれも有意に高く、秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会においても私立優勢の可能性が示された。表２に示したロジスティック回帰分析の結果からは、私立の準優勝以上進出の可能性は公立に対し11.8倍高いことが明らかとなった。また、有意傾向ではあったものの、私立の優勝可能性は6.40倍高く、準優勝への複数回の進出可能性も8.75倍高い傾向にあった。以上の結果をまとめると、秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会で準優勝以上となる、すなわち決勝戦に進出する可能性は私立が明らかに高いことがわかる。今回（2007～2022年）の春の甲子園予選佐賀大会における私立優勝のオッズ比は6.40（95%信頼区間0.999-41.0，P=0.0501）であり、先行研究（山津，2023）によるおおむね同期間（2008～2022年）の夏の甲子園予選佐賀大会の私立優勝のオッズ比は12.8（95%信頼区間1.84-89.2，p=0,010）と比べると相対的に低かった。春と夏の甲子園予選佐賀大会で私立の優勝可能性に大きな差が認められ

た真の理由は不明である。今後、佐賀県高校野球における私立の優勢度が春と夏の甲子園予選で異なるのか、そうであればその理由は何かを明らかにできるよう研究を続けていく必要がある。

本研究の結果からは春の甲子園予選佐賀大会で私立が準優勝以上に進出する可能性は公立より高く、私立優勢の一面が明らかとなったが、一方で九州地区ブロック大会を勝ち抜く可能性は公立の方が高いという実態がある。本研究における分析結果ではないが、平成以降（1989～2022年）に春の甲子園全国大会に出場した佐賀県勢は11校のうち9割超の10校が公立校であった。本研究で分析対象とした2007年から2022年に限定しても春の甲子園全国大会に出場した佐賀県勢は3校であり、うち1校は21世紀枠ではあるがいずれも公立校である。春の甲子園予選佐賀大会の1次予選は私立が優勢であるとの本研究の結果と九州地区ブロック大会の上位進出（春の甲子園全国大会出場）の佐賀県勢の多数派は公立校であるとの結果は相反するものである。この矛盾した結果に対する明確な理由は不明である。同様に興味深い事例としては、先行研究（山津，2023）で夏の甲子園予選佐賀大会において近年では明らかに私立優勢であることが示されているにもかかわらず、夏の甲子園全国大会での佐賀県勢として優勝した2校はいずれも公立校である。前述のように、平成以降の夏と春の甲子園全国大会の優勝校の9割超が私立であるとの事実と比べてみても、佐賀県における公立高等学校の硬式野球部には隠れ顕在化していない実力があるのかもしれない。今後の研究で明らかにしていきたい課題の一つである。

本研究は先行研究で明らかとなった高校野球における夏の甲子園予選佐賀大会で私立の成績が公立より優勢であるとの知見を、春の甲子園予選佐賀大会においても私立が優勢となりつつあることを証明した初めての試みである。本研究の方法論の妥当性と信頼性をさらに高め、今後も結果の

裏付けを強固にしていく努力が望まれる。一方で、本研究には以下のような研究上の限界を有しており、その解釈には慎重になるべきである。

第一に、本研究成果の一般化には慎重さを要する。本研究では2007年から2022年の16大会のみを分析対象とした。大会参加チーム数等の確実な情報が残されている大会のみを分析対象としたからではあるが、2006年以前の大会結果の傾向が本研究の結果と同様とは限らない。そのため、分析対象とする大会数を拡大して追加の検討を行うべきである。

第二に、公立校における学校統合後のデータの取り扱いを十分に検討する必要がある。先行研究（山津, 2022; 山津, 2023）では統合前の公立校の成績は統合後に存続した学校の成績に繰り入れて分析を行ったが、本研究では対象期間中に大会参加実績のある学校は統合後も統合前の成績を有する状態で独立に分析に用いた。例えば2018年に鹿島と鹿島実業が統合され鹿島高校として存続したが、鹿島実業として出場した結果は鹿島実業として分析に用い、統合後に鹿島実業としての参加実績がない年度の大会はデータなしとして取り扱った。このように取り扱った理由は、鹿島と鹿島実業は両校共に相応の実績を持つ2校の統合であったため、鹿島実業の戦績を統合後の鹿島に繰り入れると公立校の実力が過小評価されてしまう危険性があると考えたからである。鹿島と鹿島実業以外でも、比較的上位進出実績のある公立校が複数統合されていたため、この取り扱いは公立校の実力を過小評価しないためには不可欠であったと考えている。一方で、この取り扱いによる偏り（バイアス）は公立校に有利に働くと思われるため、今回の私立が優勢との結果を覆すものではないと推察している。

最後に、高校野球の成績に影響すると考えられる次のような交絡因子を分析に用いていく必要が

ある。まず、私立学校の特待制度や佐賀県の公立校における野球の推薦入試（佐賀県教育委員会，2021）の影響を考慮していく必要がある。次に、高校野球において監督やコーチなどの指導者の影響を検討できる分析の方法論を見つけていく必要がある。例えば、指導者の歴任回数は高校野球の公式戦成績に大きく影響する可能性があるため利用されるべきデータの一つといえるだろう。

Ⅴ．結論

本研究では、春の甲子園予選佐賀大会の一次予選にあたる秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の成績が公立と私立で異なるのかを検証した。その結果、私立の準優勝進出可能性は有意に高く、また私立の優勝率、準優勝への複数回進出率も公立に比べて高い傾向が示されたことから、春の甲子園予選佐賀大会においても私立優勢の可能性が示された。今後、研究対象とする大会をさらに増やし本当に私立が優勢なのか、私立優勢の理由は何かを明らかにしていく必要がある。

Ⅵ．引用文献

阪神甲子園球場，高校野球情報，https://www.hanshin.co.jp/koshien/highschool/（2023 年 6 月 30 時点でアクセス可能）

佐賀県高等学校野球連盟，http://kouyaren-saga.jp/（2023 年 6 月 30 日時点でアクセス可能）

高校野球ドットコム、https://www.hb-nippon.com/（2023 年 6 月 30 日時点でアクセス可能）

佐賀県教育委員会，2021，令和４年度佐賀県立高等学校入学者選抜実施要項

佐賀県教育委員会，2021，令和４年度佐賀県立高等学校入学者選抜 特別選抜の指定校について.

山津幸司，2022，高等学校の運営主体が全国高等学校野球選手権大会の予選成績に及ぼす影響：佐賀県における私立の高等学校は公立校より夏の甲子園大会に出場しやすいのか？，九州地区国立大学教育系・文系研究論文集，9 巻 1 号，1-13

山津幸司，2023, 全国高等学校野球選手権大会の佐賀県予選成績に及ぼす影響：私立の高等学校の予選成績は公立校より優れているのか？，九州地区国立大学教育系・文系研究論文集，9 巻 2 号，1-18

表１．秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の公立と私立の成績の比較

	公立校 （37校）	私立校 （6校）	X^2検定
優勝率（%）	13.5	50.0	0.0331 *
準優勝率（%）	24.3	50.0	0.1934
ベスト４進出率（%）	40.5	66.7	0.2319
ベスト８進出率（%）	64.9	100.0	0.0822 #
準優勝以上進出率（%）	29.7	83.3	0.0117 *
ベスト４以上進出率（%）	54.1	100.0	0.0327 *
ベスト８以上進出率（%）	70.3	100.0	0.1216
優勝複数回進出率（%）	5.4	16.7	0.3152
準優勝複数回進出率（%）	5.4	33.3	0.0289 *
ベスト４複数回進出率（%）	24.3	33.3	0.6390
ベスト８複数回進出率（%）	43.2	50.0	0.7572
準優勝以上複数回進出率（%）	10.8	33.3	0.1397
ベスト４以上複数回進出率（%）	27.0	33.3	0.7494
ベスト８以上複数回進出率（%）	54.1	83.3	0.1775

表２．秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の公立と私立の成績に関する分析結果

	オッズ比$	95%信頼区間	P値
優勝	6.40	0.999-41.0	0.0501 #
準優勝	3.11	0.531-18.2	0.2083
ベスト４進出	2.93	0.475-18.1	0.2465
ベスト８進出	私立のベスト8進出実績は100%のため算出できず		
準優勝以上	11.8	1.233-113.2	0.0322 *
ベスト４以上進出	私立のベスト4以上進出実績は100%のため算出できず		
ベスト８以上進出	私立のベスト8以上進出実績は100%のため算出できず		
優勝複数回進出	3.50	0.266-46.0	0.3407
準優勝複数回進出	8.75	0.954-80.3	0.0551 #
ベスト４複数回進出	1.56	0.243-9.95	0.6408
ベスト８複数回進出	1.31	0.233-7.38	0.7577
準優勝以上複数回進出	4.13	0.564-30.2	0.1627
ベスト４以上複数回進出	1.35	0.213-8.55	0.7500
ベスト８以上複数回進出	4.25	0.451-40.0	0.2060

$; 公立高等学校を参照とした場合のオッズ比　*; P<0.05　#; P<0.10

付録

No.	高校名	運営主体
1	伊万里	公立
2	有田工	公立
3	伊万里実（2019年に伊万里農林、伊万里商業と統合）	公立
4	唐津商	公立
5	唐津西	公立
6	唐津工	公立
7	小城	公立
8	多久	公立
9	厳木	公立
10	唐津南	公立
11	唐津東	公立
12	唐津青翔	公立
13	白石（2018年に杵島商業と統合）	公立
14	嬉野（2018年に塩田工業と統合）	公立
15	武雄（2007年に武雄青陵と統合）	公立
16	鹿島（2018年に鹿島実業と統合）	公立
17	太良	公立
18	佐賀農	公立
19	佐賀北	公立
20	佐賀商業	公立
21	佐賀工	公立
22	致遠館	公立
23	高志館	公立
24	佐賀西	公立
25	佐賀東	公立
26	神埼清明	公立
27	三養基	公立
28	鳥栖工	公立
29	鳥栖商	公立
30	神埼	公立
31	鳥栖	公立
32	敬徳	私立
33	龍谷	私立
34	佐賀学園	私立
35	北稜	私立
36	早稲田佐賀	私立
37	東明館	私立
（分析対象としたが分析対象期間中に統合となった学校）		
38	武雄青陵（2007年に武雄と統合、武雄高校として存続）	公立
39	杵島商業（2018年に白石と統合、白石高校として存続）	公立
40	塩田工業（2018年に嬉野と統合、嬉野高校として存続）	公立
41	鹿島実業（2018年に鹿島と統合、鹿島高校として存続）	公立
42	伊万里商業（2019年に伊万里農林と統合、伊万里実業として存続）	公立
43	伊万里商業（2019年に伊万里農林と統合、伊万里実業として存続）	公立

付録２．秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の出場学校数

	全体	公立校	私立校
2007年	41	36	5
2008年	40	35	5
2009年	40	35	5
2010年	40	35	5
2011年	40	35	5
2012年	41	35	6
2013年	41	35	6
2014年	40	34	6
2015年	39	33	6
2016年	41	35	6
2017年	40	34	6
2018年	38	32	6
2019年	37	31	6
2020年	36	30	6
2021年	36	30	6
2022年	35	29	6